

---

# 短編「キャッチアンドリリース」

鳥海ドゥンガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編「キャッチアンドリリース」

### 【Nコード】

N4107F

### 【作者名】

鳥海ドウンガ

### 【あらすじ】

釣り初心者父親が子供を釣りに連れて行くことになった！子供にいいところを見せたい父に奇跡のビギナーズラックが！？

富ヶ池という池の中に、トミーという名前のブラックバスが住んでいました。

トミーには惚れたメスブラックバスがいて、そのメスブラックバスの気を引くためにプレゼントする食料を、子分のボブと二人でいつも探しまわっていました。

とある日曜日の夜。その富ヶ池がある町のマンションに住むサラリーマンのT男が、休日出勤を終えて帰ってきました。

「ただいまー」

玄関に入ると、小学一年生になった一人息子のS輔が、「パパー！」と言って飛びついてきました。

「お、元気だなあS輔」

「パパ！今度釣りに連れてって！」

「っ、釣り？」

「そう！ブラックバス釣り！」

「ブラックバス釣りかー・・・」

T男は根っからのインドア派なので、釣りは苦手でした。子供のころに一度やったつきりで、それ以降は釣竿をさわったことさえありません。ちなみに、その一回の時は一匹も釣れませんでした。

「S輔、釣りに行くのは大変だから釣りのゲームやろうよ。明日、ソフトを買ってきてあげるからさ。安いやつ」

「やだやだゲームやだ！本物がいい！」

「えー、本物がいいのー？」

T男は困ったなーと思いながらダイニングの方へと向かいました。ダイニングでは、T男の妻のE美が夕食の支度をしていました。

「おかえりなさい」

「ただいま」

S 輔がT男のズボンをつかんで離しません。

「ねーねー、釣りに行こうよー」

「うーん、釣りは危ないからなー」

「危くないよー。来週の日曜日に行こうよー」

「来週は会社かもしれないからなーどうだろうなー」

S 輔はつかんだズボンを激しく揺さぶります。

「釣りに行きたい釣りに行きたい釣りに行きたい！釣ーりーにー行ーきー  
たーいー！」

「こらこら、やめろって」

T男は苦笑いしながらE美の方を見ます。

「なんでS 輔はいきなり釣りブームなの？」

「今日の昼間、K 太郎くんのお父さんがS 輔と一緒に釣りに連れて  
てくれたのよ。どうやらそれが楽しかったみたい」

K 太郎はS 輔の一番の友達で、いつも一緒に遊んでいる子です。

「へーえ。K 太郎くんのお父さんは釣りやるんだ」

「趣味で長いことやってるって言うってたわね」

「K 太郎くんのお父さんはすごいんだよ！」

T男の眉毛がピクッと動きました。

「おれは一匹しか釣れなかったけど、K 太郎くんのお父さんは十匹  
くらい釣ったんだよ！それにブラックバスがいそうな場所をズバリ  
当てたりして超カッコいいんだ！おれもK 太郎くんのお父さんみた  
いになりたい！」

T男の眉毛が連続してピクピク動きました。

「パ、パパだってブ、ブラックバスの十匹や二十匹くらい釣れるん  
だぞ？パパだってすごいんだぞ？なるならパパみたいになつたほう  
がいいんじゃないの？」

「やだ！」

「やだって、そんな・・・」

「だって釣りに連れてってくれないんだもん」

「よ、よーし・・・そんなじゃあ来週だ！来週の日曜日にブラックバス

釣りに行くぞ！」

「ほんと！」

「絶対ほんと！」

「やったー！」

翌日。会社から帰る電車の中で、T男はブラックバス釣りの本を熱心に読んでいました。

（S輔にパパはすごいってところを見せないといけないからな。まずは本を読んで勉強しなくちゃ）

本には今まで知らなかった事がたくさん書いてありました。

（へえー、釣った魚はその場ですぐに逃がすのかー。へえー、キャッチアンドリリースっていうのかー。知らなかったなー。バス釣りってのは釣り上げることだけが目的で、持って帰って食べたりはしないんだなー）

T男は本で得た知識を元にして釣り竿などの用具を一式そろえ、釣りの当日を迎えました。

T男とS輔が富ヶ池にやってきました。

S輔が大はしゃぎしている中、T男はさっそく準備にとりかかります。本で読んだことを思い出しながら竿のセッティングをしています。ここでつまずいたらカッコイイところなど見せることができないのでへまは許されません。

慣れない手つきでワームと呼ばれる擬似餌を取り付けて、なんとか二本の竿をセッティングしました。

「よしできた！S輔！やるぞ！」

「うん！」

T男とS輔は同時に釣り糸を池に投げ入れます。

「パパー、おれ釣れるかなー？」

「釣れるさ。お前のは一番高いワームを買ってきたからな」

その頃水中では、ブラックバスのトミート、その子分であるボブが餌を探して泳いでいました。

二匹が泳ぐその先に、大きなミミズに似せた疑似餌が二つ漂ってい

ます。これはT男とS輔の釣竿に仕掛けられたワームです。  
トミーがそのワームを見つけました。

「おーうまそうな餌発見！いただきだ！」

「アニキ！あれはおそらく人間どもの仕掛けた罠っす！やめたほうがいいっす！」

「ボブ、一〇〇パーセントそうだと言いつけるか？」

「い、いえ一〇〇パーセントとは言いつけるけど、ほぼ間違いない罠っす」

「ばかやろう！一パーセントでも望みがあればそれに賭けるのが男つてもんだろが！ちよつと罠かもしれないっただけでビビッてたんじゃ、女の一人もモノにできねーよ！」

「は、はい！すいやせんっす！」

「ヨーシ、したらオレが男つてもんを見せてやる！惚れたオンナの為なら一パーセントの賭けにも体ごと乗っかるぜ！」

トミーはT男のワームに食いつきました。

その瞬間、ワームは水面に向かって強く引っ張りあげられ、トミーの口には針がひっかかります。

「うぎゃあああー！罠だあー！」

「ア、アニキイイー！だから言つたじゃないっすかあー！」

地上ではT男が興奮しながらリールを回しています。

「来たー！来た来た来たー！」

「わー！パパがんばれー！」

「よっしゃー！」

ついにT男はトミーを釣り上げました。

地面に釣り上げられたトミーは全身をバタバタさせています。

「く、苦しい！息ができません！死ぬかも！」

S輔は大喜びしています。

「わーすごい！パパすごい！」

「ワハハ！すごいだろー！」

T男は釣った記念にトミーを写真に撮りました。

「いいかいS輔。ブラックバス釣りのマナーではキャッチアンドリリースと言つて、釣ったらすぐに逃がしてあげるんだよ」

「うん！キャッチアンドリリースだね！」

T男はトミーを池に放してやりました。

水中ではボブが途方に暮れています。

「やられちまったああ！アニキがやられちまったああー！」

どぼんつ。という音と同時に、ボブの目の前にトミーが落ちてきました。

「ア、アニキー！無事だったんですかー！」

「無事もクソもねえ！人間のやつ、キャッチアンドリリースだと言つて、俺をすぐに逃がしやがった！舐められたもんよ！」

「アニキ、よく人間の言葉がわかりますね」

「ばかやろう！俺たちはアメリカ原産だぞ！それくらいの英語は聞き取れるわ！」

「す、すいやせん！」

「それにしても人間どもめ。完全にナメくさった真似をしやがってこのまま引き下がるわけにはいかねえな。今度は逆にあいつらを水中に引きずり込んでやる！」

「アニキ無理つす。やめたほうがいいつす」

「ばかやろう！やられたまま帰ったんじゃ、惚れたオンナに合わす顔がねえだろうが！人間どもに一泡吹かせるまでは帰れねえ！」

すると、T男のワームがまた水中に入ってきました。

「よっしゃあ！チャンスじゃい！」

トミーは勢い良くワームに食いつきます。

「うぎゃああああー！！！」

トミーの口に針がひっかかり、水面に引っ張り上げられていきます。

「アニキイイー！」

またもトミーを釣り上げたT男、S輔の親子は大喜びです。

「やったぞ二匹目だ！」

「パパすごい！」

トミーは記念写真を撮られて再び逃がされました。

「くそう！またやられた！」

「アニキー、あきらめたほうがいいですよ、帰りましょうよー」

「まだまだ！帰りたければひとりで帰れ！」

「そんなー、アニキを見捨てて帰れないですよー」

「ならそこで黙って見てろ！」

そこへまた、T男のワームが入ってきます。

「もらったあ！」

トミーが食いつくとあつという間に釣り上げられていきました。

「うぎゃあああー！」

「アニキイイイー！」

「よっしゃあ！また釣ったぞ！」

「すごい！三匹目だ！」

こんな調子でトミーは二〇回も釣り上げられ、T男は二〇回もトミーを釣り上げました。

「あにき、もう一個の方を狙ったらどうですか？」

「ばかやろう！一度狙った獲物は絶対に逃がさねえのが男ってもんだろうが！」

「はい！すいやせんつす！」

地上ではT男とS輔が思わぬ大漁に大喜びしています。同じ魚を二十回繰り返し釣ったということには気づいていません。

「わははははー！すごいだろうパパは！」

「すごいすごい！二十匹だよ！K太郎くんのお父さんよりもたくさん釣ってるよ！」

「S輔もがんばってパパみたいになるんだぞ！」

「うん！おれガンバル！」

そうこうしているうちに日が暮れてきたので、二人は帰ることにしました。

家に帰ると、E美が夕食の支度をしていました。

「おかえりなさい。どうだったの？」

「いやあれがすごいんだよ。二十匹も釣れてさあ」

「それもパパが全部釣ったんだよ！二十匹だよ二十匹！」

「二十匹も！そりゃすごいわね！」

「男一家は二十匹釣った記念でおかすがいつもより豪華になりました。」

その頃、水中では・・・。

「さあ来いどうした！オレはまだまだ負けてなんかいないぞ！来ーい！」

「アニキー、多分もう帰ったんですよー」

おしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4107f/>

---

短編「キャッチアンドリリース」

2010年10月9日22時33分発行